

賢問愚問解説コーナー：「蒙古襲来絵巻」の史料性格について 「蒙古襲来絵巻」の史料性格について、具体的に教えてください。

服部，英雄
くまもと文学・歴史館：館長

<https://hdl.handle.net/2324/4067127>

出版情報：歴史と地理. 日本史の研究. 269, pp. 51-55, 2020-06. 山川出版
バージョン：
権利関係：



質問

「蒙古襲来絵巻」の史料性格について 「蒙古襲来絵巻」の史料性格について、具体的に教えてください。

はじめに

「蒙古襲来絵詞」（「蒙古襲来絵巻」）は宮内庁三の丸尚蔵館に所蔵されています。大型二巻の巻物となっており、表に「蒙古襲来絵詞」と書かれています。絵と詞書で構成されているから絵詞と命名され、所蔵者である宮内庁もこの表記を用いています。ただし現在の姿はのちの時代の表具ですから、絵巻（絵詞）の原作者たちが何と呼んでいたのかは不明です。明治まで細川藩や所有者であった大矢野家では「蒙古襲来絵」「蒙古襲来絵巻物」、また、「蒙古襲来絵詞」としたりして、併用しています。写が多数作られますが、やはり「蒙古襲来絵詞」だったり、「蒙古襲来絵巻」だったりします。「絵巻物」には男衾三郎「絵詞」のように絵詞と表記したものと、源氏物語「絵巻」のように絵巻と表記したものがあります。『国史大辞典』『誰でも

[回答者]服部 英雄

読める日本史年表」、そして山川出版社の教科書は「蒙古襲来絵巻」としています。ただ一般的には現在の表題を尊重し、「蒙古襲来絵詞」と表記することが多く、学界・論文題目での使用比は「蒙古襲来絵詞」が五〇に対し、「蒙古襲来絵巻」は二です（Cinii Articlesを参照した）。江戸時代には「竹崎絵」とも呼ばれ、主人公である竹崎季長の事績しか描かれていないので、「竹崎季長絵詞」とすべきだとする学説もあります（「竹崎季長絵巻」という表現もありうるが、そういう主張はない）。「絵詞」は蒙古合戦（文永の役・弘安の役）に参戦した鎌倉幕府の御家人竹崎季長の体験を絵巻物にしたものです。蒙古襲来はとても重要な歴史事件でしたが、合戦に参加した武将・兵士（当事者本人）の参戦記録はきわめて少なく、御家人が書いた軍忠状（恩賞請求）が若干と、中国側の個人顕彰碑が、参戦者自身ないしはその近親者による記録としてあるだけです。ところがこの絵詞は合戦を絵画として表現しています。圧倒的に豊富な情報量があり、世界的にも例を見ない貴重な歴史資料です。長く肥後熊本藩士であった大矢野家に伝来してきましたが、明治天皇に献上され、当時の金額で三五〇〇円が支払われました（当時の一円は今日の一万円から二万円ほどに相当）。文化財保護法による文化財指定（国宝など）を受けていないのは、長く皇室財産であったという経緯によります。

絵詞はだれが作成したのか？

竹崎季長本人です。過去の研究では季長死後の第三者による制作と主張されたこともありますが、間違いです。場面場面では季長と対話した少式景資や安達泰盛の口調が伝わります。後世の人間では表現できない生々しさがあり、泰盛との対話などは熱意が余って、洗練されていない語り口になっています。後世の人物による創作ではなく、季長本人の回想による逐語記録です。河野飯屋形の場面で「妻戸ハ不可有之處、絵師書違也」(飯屋形に妻戸はないはずである。絵師の書きちが間違っている)と注記があります。外の様子がわかるよう、妻戸は外してあった、という意味に思われます。このようなことが書けるのは、実際に河野飯屋形にいて、その細心の配慮に感銘を受けた竹崎季長以外にはいないのです。

ではいつ作成されたのか？

状況から竹崎季長が肥後国海東郷地頭職を獲得し、その経営が安定的に始まった正応六年(改元されて永仁元年となる、一二九三)頃の作成でしょう。むろん竹崎季長の在世中です。奥書に「永仁元年二月 日」とあります。おおよそこのころの作成ですが、奥書は改元前に新年号が使用された未来年号使用文

書で、後世のものになります。内容も絵詞とズレがあります。絵詞の作成者によるものではないと考えます。

絵師は何を材料に絵詞を書いたのか？

弘安四年(一二八二)の合戦終了後、一〇年以上の年数が経過していましたが、絵師が所属していた工房には蒙古合戦についての豊富な画材があつたようです。例えば少式景資の「むま(馬)具足」については「似絵」(写生)、つまり実物を見て描いたと注記されています。馬具足とは馬具で、ここでは鞍を指します。少式景資は弘安八年(一二八五)の岩戸合戦で敗死し、この世の人ではありませんでしたが、絵師は遺品(実物)を見ることができました。鞍の下には豪華な虎の皮が使われていました。宋か高麗からの輸入品で、少式景資の財力を語っています。絵師がここにだけ、わざわざ「似絵」と注記し、強調しているのはこのためです。絵師が大宰府周辺にいたことは確実で、大宰府画匠司そのものか、関係者の可能性も考えられます。鎮西探題などから記録作成を依頼されていたことも考えられます。きわめてリアルな蒙古軍の描写もあります。例えば蒙古兵(高麗兵)の馬の尻尾が全てクルクルと巻かれています。中国では唐太宗の西安昭陵の六駿レリーフの馬に尾が結ばれていますが、東京国立博物館・九州国立博物館での「三国志展」に展

示された漢の時代の儀仗備でも、馬の尻尾が巻かれていました（甘肅省博物館蔵）。中國大陸の馬の習俗を知らない人間には画くことができないものです。工房には合戦を目撃した絵師による豊富な記録と画材集が用意されていたに違いありません。しかし絵師が所属する工房メンバーは、博多湾海戦では兵船に同乗できなかったようで、海の戦いの様子には不自然なところがあります。真夏なのに、水手が鎧を着ており、これでは目的のまで漕ぎさることはできません。ふつうは漕いでいるさなかの水手は、ふんどしだけの裸のはずです。

絵詞をどう読むのか？

絵詞は二巻ですが、内容からは①文永の役（前巻前半）、②鎌倉行き（前巻後半）、③弘安の役（後巻）の三つで構成されます。①文永の役は冒頭部が欠損していますが、箱崎から鳥飼浜まで基本となる場面は残っています。ただ少式景資と季長対面の場面で季長がおらず、菊池武房と季長がすれ違つて問答する場面でも季長が描かれていないなど、失われた絵があります。詞書から内容は推定復元されます。これまで接続関係がわからないといわれてきましたが、鳥飼干渴の対岸にて待機する蒙古兵の一人が手をかざし、一人が指を差して、一人がこぶしをあげて見る先には、苦戦する竹崎季長を、まさに痛めつけて

いる三人の勇敢な蒙古兵・友軍の活躍があつたはずなので、こうしたわずかな仕草から、構図が復元でき、左右に接続することもわかります。

鳥飼浜で、三人の屈強な蒙古兵に竹崎季長が襲撃され、膝を撃たれ、馬も複数力所から流血し、跳ね上がります。①でのハイトです。実はこの前に、逃走する蒙古兵の一団が描かれています。倒れて絶命する者がいますが、二人だけが果敢に反撃します。しかし一人の左目に矢が当たり、血が迸っています。その矢羽は竹崎季長のエビラにある矢羽の模様と一致します。竹崎季長が射た矢が敵の目を射抜いたのです。正確な射撃ですから、季長は静止に近い安定した位置から射たはずで、しかし画面では、腹を撃たれた馬が苦痛のあまり暴れ回り、恐怖で尻尾を後ろ足の間に巻き込んでいます。三人の蒙古兵出現に対応するものです。鳥飼浜の場面には複数の前後する時間帯（季長優勢・季長劣勢）が描き込まれています。この三人がいるからこそ、陣取る蒙古兵たちは指さし、手をかざして欣喜雀跃しているのです（※一時期、三人の蒙古兵が当初には描かれておらず、ただの空白で、かなりのちの時代になってから書き込まれたとする説が、提唱されました。絵詞全体を味読のうえで、はたしてこうした説が成立するのかわるか、ご自身でよく考えてみてください）。

続く⑧鎌倉行きでは安達泰盛邸での場面があります。ここでも人々のどのような仕草が画面に描かれているのか、そのひとつひとつを読んでみましょう。泰盛邸の唐門（表門）で警固している侍が手をかざしています。視線の先には見事な河原毛馬がいます。烏帽子親である長門守護代三井季成が季長に贈った馬が河原毛馬でした。ここでは馬が主役です。

奥では安達泰盛と竹崎季長の長いやりとりが続いています。次の間で待ちくたびれた蘆名判官が従者を呼びつけ、何かを言います。不快さわまりない表情。パントマイム、無言劇です。「前の男、いつまでこのわしを待たせる気か。尋ねて参れ」。庭の従者の表情に緊張が走ります。絵をじっくり読み込んでいくと、詞書に書いてなくとも、登場人物が何を言っているのかが、わかってくるから不思議です。絵詞の魅力です。

◎弘安の役は二カ月以上続きます。六月の博多湾海上・総反撃戦では、逆風のため弓矢が撃てず苦戦した様子や、志賀島に潜入して敵情偵察を行った様子が描かれています。最終戦・閏七月五日、季長は守護代安達盛宗の船に乗ろうとしますが、失敗。それでも最前線にまで行くことができ、敵船に乗り込みます。そこで蒙古兵の首を二つ取るという手柄を立てますが、至近距離から敵の矢が腕に的中。絶体絶命のところを友軍からの異物（糞尿）投擲作戦による、蒙古勢の動揺で救われます。

無謀にも近い勇敢な行動↓ピンチ↓それを切り抜ける、という展開の繰り返しです（鳥飼浜突入の失敗、志賀島偵察で敵に発見される、博多海上戦で大敗北、最終戦での負傷、生還）。まことにスリリングです。

元寇防塁が描かれていますね

◎弘安の役では石築地の前を行進する竹崎季長一行と石築地上の菊池一族が描かれています。石築地は遺跡として今も博多湾岸の砂丘の中に残っており、国指定史跡に指定され保護されています。指定名称は「元寇防塁」です。よく見る写真は、今津松原か、生の松原（いも）のもので、今津は発掘調査の結果、検出された遺構（本物）が、砂丘の中に露出表示されています。生の松原は砂丘に埋もれていた本物の上に、新たな石積を復元したものです（図1）。石築地は障壁なので、管理されなくなると、風砂によって埋没します。本物は砂丘の中に保存されますが、見た目・高さがわかりにくいという理由で、大河ドラマ「北条時宗」放映のころに、二メートル程が本物の上に継ぎ足されています。ここは現代の「元寇防塁」です。

元寇防塁という名前は、大正二年（一九一三）に九州大学医学部教授だった考古学者中山平次郎によって提案されました。元寇という表現は鎌倉時代ではなく、江戸時代に歴史学者が使用

し始めた言葉です。倭寇、応永の外寇のように、「寇」はあだ・外敵・害を加える、奪い取る、といった意味です。

水戸藩の学者が編纂した『大日本史』の本紀（延宝四年（一六七六））や列伝に「元寇」が頻出しますが、現在の固有名詞的な用法ではなく、「寇」は動詞です（「元寇西陲」、元は日本の西端を犯した）。「禊元寇」「祈弭元寇」（弭は「やめる」）は、元がやってこないように祈った、という意味で、現在の文永・



図1 生の松原の「元寇防塁」（福岡市提供）

弘安の役をさす用法とはニュアンスが違います。しかし次第に蒙古襲来は元寇と表現されるようになりました。水戸藩では小宮山昌秀（楓軒）による『元寇始末』（天明七年（一七八七））のような歴史書が刊行されています。明治には軍歌「元寇」も作詞作曲され、広く愛唱されました。大正・昭和（戦前）になると蒙古襲来という人は、ほとんどいなくなり、「元寇」が国民に浸透します。元寇も元寇防塁とともに定着しましたが、鎌倉時代の古文書に登場するのは「蒙古襲来」「異賊襲来」「異国合戦」など、そして防塁は「石築地」です。

おわりに

蒙古襲来研究は江戸時代以来の長い歴史があります。軍国主義の時代には神風と同一視されました。多くの研究者により様々な説が提案され、受容され、あるいは淘汰されていきました。研究者一人一人が違うことをいっていると考えてください。インターネット・ウェブサイトでは諸説が乱立しています。安易に信ずることなく、どこがおかしいのか、不自然なのか、ご自身で判断し、科学的な説を採用していただきたいと思っています。あなたが答えを見つける必要があります。絵詞もぜひ絵解きしてみてください。

（はっとり・ひでお／くまもと文学・歴史館館長）